

「『男体山碑』は、男体山登拝の証」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



白装束姿の
登山拝者

「男體山 嘉永五年壬子歳
十二月吉日建之 東荒針村先
達阿部久右衛門 駒生村講員
拾一人」と刻んだ石碑がある。
このようないわゆる「男體山碑」と
称する石碑は、市内の各所に
ある。駒生町の近隣についてい
えば下荒針町鹿沼街道沿い
下荒針町阿部氏の屋敷内、鶴
田町高靈神社境内、上砥上星
宮神社境内 下砥上砥上神
社境内等にある。男體山碑
は、基本的には江戸時代の村
単位に組織された男體山登拝
講(男体講)によって建立された
ものである。男體山碑の多く
は、享保の頃(一七一六～三五)
から江戸時代末期頃に建立
された。

次に江戸時代から明治期頃
の男體山登拝の様子を紹
介しよう。登拝に参加す
る者は、くじ引きで選ばれ
た者(代参人)および自主
的参加者で、彼らを行人
ともいった。

行人は登拝に際し、三
日ないし五日間、行屋に籠
り精進潔斎しなければな
どもいった。

さて、中禅寺ではさらに行屋
に六日まで籠り、中
禅寺湖で禊(みそぎ)を行い、
七日早朝に頂上を目
指す。頂上でご来光
を拝し、下山、帰途
につく。帰村後、行
衣を脱いで平常人に
戻る。翌日、行屋の

駒生町の湯殿山神社境内に
「男體山 嘉永五年壬子歳
十二月吉日建之 東荒針村先
達阿部久右衛門 駒生村講員
拾一人」と刻んだ石碑がある。
このようないわゆる「男體山碑」と
称する石碑は、市内の各所に
ある。駒生町の近隣についてい
えば下荒針町鹿沼街道沿い
下荒針町阿部氏の屋敷内、鶴
田町高靈神社境内、上砥上星
宮神社境内 下砥上砥上神
社境内等にある。男體山碑
は、基本的には江戸時代の村
単位に組織された男體山登拝
講(男体講)によって建立された
ものである。男體山碑の多く
は、享保の頃(一七一六～三五)
から江戸時代末期頃に建立
された。

体山頂遺跡から徳次郎の伴家
守が貞治三(一三六四)年卯月
(旧暦四月)十八日に十三度目
の男體山頂を果たした金銅板
製の禪頂札が出土した。このよ
うに当初男體山登拝は、個人
で行い、また登拝の日も決まつ
ていなかつた。それが江戸初期
には旧暦七月七日と定まり、
また、前述したように享保の
頃になると栃木県内各地に男
體講が組織されたのである。

ところで登拝に際しては、先
達と称する案内・指導者を必
要とした。経験深い行人がな
る場合もあれば、専門の先達
に依頼する場合もある。先の
石碑に刻まれた東荒針村の阿
部久右衛門は、日光山から免
許を受けた先達である。彼は
自宅屋敷内に行屋を構えるほ
どの熱心な先達であり、地元
の男體山登拝の先達を務めた
者であった。

さて、中禅寺ではさらに行屋
に六日まで籠り、中
禅寺湖で禊(みそぎ)を行い、
七日早朝に頂上を目
指す。頂上でご来光
を拝し、下山、帰途
につく。帰村後、行
衣を脱いで平常人に
戻る。翌日、行屋の

された。当時の男體山登
拝が盛んであったかが窺い知れ
る。

男體山登拝は、古くは男
體禪頂と呼ばれ、すでに南北
朝時代には行われていた。男

日頃、行衣にわらじ履き、木
笠を被り金剛杖を突き出立す
る。

したものが、古来、日本人
は山の頂にはあの世(死後の世
界)があると信じた。そして生
きながらあの世に行くことによ
り、生まれ変わることを期待
したものである。民俗学では
それを擬死再生という。秀麗
な山谷を誇る男體山は、擬死
再生をなしえることのできる山
とされた。医学の未発達な時
代なればこそ、男體山登拝は
盛んに行われたのである。近

年、男體山登拝は、レジャーハ
ン、信仰登山は薄れた。老化
防止に効能があるとされるさ
まざまなサプリメントが出回る
世の中では、わざわざ苦労して
男體山を登らなくてもよいのか
かもしれない。



駒生町
湯殿山神社
境内の
男體山碑

後片付けを行い、代参人は、
受けて来たお札を各家に配り
お役目終了となる。

このように男體山は、古く
から信仰の対象とされ、登拝
が行われたが、登拝はなに故
だつたのか。勝道上人は、男體
山の頂上に補陀落觀音淨土が
あるとしたが、古來、日本人
は山の頂にはあの世(死後の世
界)があると信じた。そして生
きながらあの世に行くことによ
り、生まれ変わることを期待
したものである。民俗学では
それを擬死再生という。秀麗
な山谷を誇る男體山は、擬死
再生をなしえることのできる山
とされた。医学の未発達な時
代なればこそ、男體山登拝は
盛んに行われたのである。近

年、男體山登拝は、レジャーハ
ン、信仰登山は薄れた。老化
防止に効能があるとされるさ
まざまなサプリメントが出回る
世の中では、わざわざ苦労して
男體山を登らなくてもよいのか
かもしれない。